地方の村落生活の實態から得られた解釋に基ずいて最初からその視點を神社祭祀におき、專らそれを通じて中世協同體を見ようとしたもので、そこに本書のユニークな特色が存すると共に、またその限界も認めうるのではないかと思われる。即ち中世といえばまず代表的に武士の社會を考え、鎌倉幕府の諸政策や貞永式目の諸規定を通じて、その社會の構造や特質を論ずることが從來一般的であつたに對し、本書は一層根元的に中世の村落社會に立入りそこに營まれる族緣・地緣並に心緣の諸關係を吟味して、それらが究極はいわば家族主義的ともいうべき族緣協同體の形態をとつていることを論じている。その際著者の民俗學の造詣が豊富な資料を提供すると共にその結論の方向をも指示したかと思われるが、併し今日の民俗學が諸事例の比較と類別とによつて單にそれらの事實の前後關係を序列づけるに終りがちなのに對して、著者は何よりもこれを確實な文獻資料の中に實證することに努めたようで、本書において著者の最も苦心せられたのも蓋しその點でなかつたかと察せられる。

翻つて思うに著者の協同體に對する見方の特質ともいうべきは、それを究極は意識に還元して考えようとする立場である。如何にも族緣協同體というも決して自然的・生理的血緣關係のみによつて成立するものではなく、そこに多くの非血緣者を含みつゝなお且つそれを家族若しくは同族として意識するところに成立するものとすれば、それは究極は心的なものに歸しえられようかもしれないが、併しそれ以外にもなお何等かより一層現實的な契機の存在が考えられないであらうか。かくいえば今日では人は直ちに一定の生産關係若しくはそれに基く支配關係の如きものを想定するであろうが、確かにそのようなものが中世協同體をどのように條件づけ或は性格づけたか、というような點について本書はなお考察すべきものを多く遺していると考えられる。著者もいうように封建制度の中には家族主義が本質的に含まれていることは疑を容れないが、封建制度をその面からだけ理解することに今日の人は十分安んじないのではなかろうか。さもあらばあれ、中世社會のその面に關しては今日多くの、というよりもむしろすべての研究がそのメスを入れようとしている。そこに於いて足りないのは却つて本書の如き意識の面を主題とした綿密且つ明晰な考察であるとすれば、この書の今日の學界において有する意義は極めて大きいといわなければならない。著者の俊敏な頭腦と旺盛な精力とに對し深い敬意を表するものである。

（昭和廿五年八月、東京・弘文堂發行・A5版二九〇頁・定價三五〇圓）

——柴田　實——

オーエン・ラティモア著
小川　修譯

中國

「中國は今日の世界でもつとも重要な國々の一つであるが、おそらく次の百年間ではいろいろな面でその中でももつとも重要な國となるであろう」（序文）という著者の世界の歴史に關する根本的認識の上に立つて本書は書かれている。從つて從來の宣教師がためにしたところの、また旅行家が興味本位に描き出したところの、おそらく世界の大部分の人々が抱かされた誤れる中國觀に鋭く對立する。そしてそのような誤れるイメージがなお清算される事なく生き續けるならば、それはこのつぴきならぬ世界の現實におかれた世界の人々、特にアメリカの人々にとつてこの上もない不幸である。著者の理解する中國はそのようなものではない。それは單なる王朝の交

替、或は善と惡との交替に過ぎぬような退屈なわびしい帝王史ではなく、中國人の生きて躍動する生活と民族の精神の、中國人の輝やかしい内的發展の歴史である。本書はかような發展の事實を明かにし、讀者のために思考の材料を提供しようとする極めて意欲的な仕事である。

著者は現在ジョンス・ホプキンス大學内のペーチ國際問題學院の院長であるが、すでに「トルキスタン沙漠紀行」(一九二九年)、「韃靼高原」(一九三〇年)、「滿州」(一九三二年)、「滿洲の蒙古人」(一九三四年)、「中國の内陸アジア邊疆」(一九四〇年)、「蒙古の旅」(一九四一年)、「農業中國と遊牧社會」などの諸著、その他數多くの論文によつて示された遊牧社會及び中國邊疆地方に關する鋭い把握が我國の學界にも深い感銘を與えた事は周知の通りである。こういつた著者が現實の世界に對處するとき、「アジアの解決」(一九四五年)、「中國」(一九四七年)—「近代中國の形成」(一九四四年)—「アジアの情勢」(一九四九年)、「新疆」(一九五〇年)などを世に問うている事は注意されなければならない。

本書については、すでに吉川幸次郎教授が「思想」三〇八號(一九五〇年三月)の「ラティモアの中國觀」においてまことに親切な紹介をしておられるので、こゝでは簡單に論點を要約しつゝ二三の感想を述べてみたいと思う。

本書の原著は「近代中國の形成」(一九四四年 The Making of China)の改訂版として一九四七年に上梓されたものらしいが、この China: A Short History は第一部「土地と人」(一—四八頁)、第二部「現存最古の文明」(四九—一四二頁)、第三部「近代中國」(一四三—一九八頁)、第四部「中國と近代世界」(一九九—二四六頁)の四部より成り、各部はさらに夫々三つの章に分けられている。

中國史の理解のために準備せられた第一部では、緯度によつて中國とアメリカの地圖を重ね合わせて見せつゝこの巨大な中國という地塊の自然環境を概觀して南北中國の風土的相違の理解に導き(第一章中國とはどこか、そしてどんなところか)、次に「典型的な中國人」として五つの指向性を指摘して、中國人が人間的に少くとも日本人やラテン系人すらよりもアメリカ人に近い陽氣な仲間である事を感じさせようとする(第二章中國人とはどういう民族か)。第三章「邊疆地帶」では邊疆地方の蒙古・東北中國・トルキスタン・チベットの四つのタイプが示されている。著者はこうして人間と自然環境との交互作用に注意しながらその上に展開される歴史的發展を理解するために次の二つの「親鍵」を用意している。すなわち、

(1)「農民」と「紳士」という中國人の二つのタイプの相互關係。

(2)中國と僻遠地方の「夷狄」との間の勢力の均衡。

第二部、これは中國史の「曙光帶」殷王朝から清帝國に及ぶものであり、第一章「中國の誕生」では殷の種族國家時代と周の封建主義の時代について述べられている。この殷周の長い期間を通じて所謂周代の中國古典文化が形成せられるのであるが、これこそ以後二千年以上にわたる中國文化の發展の出發點であり、最も強くそれを規定したものに他ならない。ついで周朝が東遷し「文化の中心」が黄河下流の大平原に移ると封建主義は新しい發展を生み出してくる。すなわち「西疆の見張役」とでもいうべき封建國家秦によつて遂行せられ、「全中國がはじめて單一の帝國に統一された」次の第二章「帝國時代」が始ま

る。この秦によつて創められた帝國形態の政治は以後清帝國まで續く。それは西洋世界における政治權力の中心舞台の目まぐるしい變轉に比べると閉鎖的であり停滯的であるかのように見える。しかし著者は云う。「事實は中國はそれ自身の内的發展の歴史をもつている」と。中國の歴史は「中國文化の成長と中國民族の膨脹」の歴史であり、その間に生起する諸事件、例えば王朝の交替などはこの大きな文化的發展の内部での一過程にすぎないと。こゝに私はラティモアの描き出す中國史を理解する根本問題の一つがあると思うのだが、それはそれとして次に進もう。この中國民族の膨脹というのはすなわち「中國文化の外的發展」―「文化の地理的膨脹」と同じ意味なのだが、この文化の内的外的發展が同時に統一的帝國によつて實現される時代、それが中國文化の發展という大きな波動の一つ一つの頂點をなす。秦・漢帝國の「帝國の開始」、隋・唐帝國の「文化の頂點」、元帝國の「蒙古時代」がそれである。

ところでかような帝國時代にはその「政治構造が全體としてもはや中國民族およびかれらの文化の地理的膨脹を効果的に處理」できなくなつた結果惹起する王朝の交替が特徴的に行われたが、それは一體どのようにして行われ、どのような意味を持つものであるかという「全中國史の根本問題の一つ」を明かにするために、著者は「どのようにして王朝は興亡したか」という特別の節を設けている。こゝではウイットフォーゲルの中國社會の惡循環理論を想起してもらえば充分であろう。これが著者の親鍵の一つ、「農民」と「紳士」との二つのタイプの相互關係に他ならない。

この中國文化の發展を理解する今一つの運動法則はすなわち農業中國と遊牧社會との勢力の均衡―第二の鍵。この勢力の均衡狀況を最もよく示し、その均衡の間に形成されたものとして著者は長城地帶の所謂邊疆地方に注目する。これについては説明するまでもないと思うが、紀元十世紀頃になると新しい發展を開始して牧人の營む社會を含む北半分と中國人住民の營む南半分の社會とを結合させた邊疆王國が形成せられ（遼・金）、次の十三世紀の蒙古の大征服の發展過程に元帝國となつて帝國時代の一頂點、「蒙古時代」を現出する。明帝國はかような異民族の統治下におかれた中國人の熾烈な民族主義によつて闘い取られた中國人の王朝であるが、最も中國人化していた滿洲人の清帝國がそれに續く。

しかし中國社會は清帝國に至つてこれまでとは全く異つた新しい歴史のコースを辿る事となつた。すなわち西洋世界という新しい世界との接觸とそれによる近代中國の形成である。第三章「中國と西洋」では「市場としての中國」、「外國支配」、「門戸解放」、「義和團事件」の諸節に分けて帝國末期の諸情勢、特に帝國主義諸國が中國の「強い男」（ストロング・マン）を求めて角逐しつゝ清帝國―帝國時代を最後的崩壞に導く過程が述べられている。

第三部「近代中國」は第一章「中國革命」において華僑の動向に注意しつゝ孫文の指導する第一革命（一九一一年）について述べ、そこに生み出された軍閥―帝國主義の求めた「強い男」―の時代を通じて、國民黨の指導下の大衆的昂揚のうちに達成された第二革命（一九二六―二七年）について述べている。ついで第二章「大戰前の中國の變化」第三章「大戰」がある。

第四部は中國の近代化過程に現れた家、婦人、教育、宗教、文學と藝術等に關する「社會的變化」の章と、近代中國の基本的な經濟問題を取扱つた第二章「未だ成らざる革命」及び現代中國の政治的問題を世界的關連において捉えようとした「中國政治と世界政策」

の章がある。

以上が本書の内容の概略である。世界史の根本的變革という認識から書かれた本書は讀者にいろいろの意味から深い感銘を與えるに違いない。特に中國民族の發展の歴史が常に世界史的連關において捉えられ、中國史の基本的な二つの運動法則を見出す事によつて從來の退屈な帝王史をやめ、英雄や惡人どものうしろにある歴史的發展の大きな背景を浮び上らせているのに成功している事は、本書が概説書として頭のよいすぐれたものである所以である。特に歴史的記述の約半分が近代中國に關して與えられている事は少くとも中國史書の新しい方向として注意されなければならぬであろう。

ところで以上のような中國史の理解の仕方にはなお各々の立場からの問題があると思うが、更に個々の點についても、例えば周代の封建制の問題、秦・漢帝國の構造、「農民」と「紳士」との關係の惡循環理論、或は近代中國の革命的變革に關する理解の仕方その他について疑問を提出する事が出來る。

中國の歴史が中國民族の生活と精神の生々した發展の歴史である事はまことに著者の云う通りである。そしてそれが中國文化の内的外的發展を持つ事も確かであろう。それではそのような文化は一體どうして創り出されたものであろうか。それは少くとも所謂讀書人連が勝手氣儘に創り出したものではなかつた筈である。それは例えば中國の文章が万人の認めるように難解な、讀書人の獨占物となつた事實、或は儒教の家父長的倫理があらゆる種類の隷屬を規定しようとした樣に、常に支配層と被支配層との血みどろな闘いのうちに創り出されたものである。そこに生々した文化の歴史的發展があるし社會の大きな動きと壓倒的多數の民衆の健康な生活の反映がある。こう私は理解するのだが、著者の文化はタイプであり、文化交流によつて、得體の知れぬ精神によつて進歩するものに他ならぬようである。佛教が傳わつて國家佛教として肉體化せられ支配階級のイデオロギー化せられる迄には、支配と被支配との眞劍な對決と咀嚼があり、それは單なる文化交流ではない。そういつた過程こそまさに歴史の本筋をなすものであり、文化の發展の内容をなすものである。著者の文化發展の歴史にはこの事が全く顧られず、文化の内的發展と惡循環理論は機械的な組合わせに終つているように思われる。この事は著者の歴史を書く立場と直接するのであるが、それは歴史を構成してゆく手法によく示されている。

こゝでは確かに常に中國的世界の密接な關連において考えられている。ではどういう方法で。著者は先ず農業中國、諸邊疆地方、遊牧社會、或は農民、紳士、更に種族國家、封建社會、帝國の構造という風に中國の歴史の夫々の社會のタイプを示してくれる。しかしこれらのタイプはどのようにして統一的な中國の歴史を發展させたのだろうか。それを知る爲に中國社會の惡循環理論と南北兩社會の勢力の均衡が與えられる。これを上手に組立てゝゆく事によつて中國の歴史が出來上る。こゝには中國の農民達は勿論、支配と被支配との生々とした歴史の創造が後方に押しやられている。だからこゝには、もしそういつた惡循環が中國社會の變らぬ運動法則であつたとするならば、正にそれは中國文化の停滯につながる中國社會の停滯を示すという著者の不本意な自己矛盾が起つてくる。中國文化は確かに生々と發展したものである。そしてその奥底には例えば貴族・門閥から地主・士大夫、奴隷的農民からより自由な農民へ、貴族のかいらい的皇帝から獨裁君主へという惡循環理論からはみ出す巨大な（四六頁へ續く）

いた原因の一つであつたことは既に通説に屬するけれども、このロンドン資本家層の中に、所謂近代型商人層に交じつて、當時最もその獨占的地位を攻撃された舊冒險商人組合の姿が力強く浮かび出ていたことに注目すべきであろう。

勿論こう云つても、清教徒革命の目標が獨占廢止、營業自由の實現にあつたこと、而もこれが見事に成功したのであつて、ただ舊冒險商人組合のみが上述のような皮肉な理由で存續し得たのであつたと云うことを否定するわけではない。極言すればクロムウェルは最大の敵一人を生かし、その財力によつてそれ以下のすべての敵を倒すことに成功したのであつた。

(b) 註①前掲、English Economic History Select Documents, 1914, pp. 460-61.

②一三九七年創立のロンドン毛織物市場

③ G. Unwin, Industrial Organization. pp. 190-93.

むすび

以上私は幾つかの觀點から新冒險商人組合設立の問題を考えて來たのであるが、尙もつと多くの觀點から考察されねばならないのは勿論である。殊に、從來ばらばらに行われて來た新組合に關するいくつかの考察を整理綜合してみたいと云う最初の意圖を滿たすことが出來ず、やはり幾つかの問題を羅列するにとどまつてしまつた。併し新冒險商人組合設立の問題は當時のあらゆる問題に結びついているから、この新冒險商人組合の設立と云う一つの焦點をつかめば當時の事情を考えるのに便利なことだけはたしかであると思う。

（一一二頁より）

歴史的發展が遂行せられている事を忘れてはならない。

以上のような點に私は本書について少なからぬ疑問を抱くのであるが、何よりも世界史の現實に對する正しい認識に立ち斬新な方法をもつて手際よくまとめられた本書はすぐれた概說書というべきであろう。殊に著者の意圖したように多くの點について夫々考えさせてくれる。また特に近代中國の部分は現代に直接する中國近代社會への著者流の理解が示されており、またそういつた理解の仕方にはわれわれとして首肯出來ない點も多いのであるが、何れにしろアメリカの指導的な東洋通としての著者が、今起りつゝある東洋の現實を理解しようとする仕方をここから讀み取る事が大切であろう。著者がその爲めに約半分を割いた「近代中國」以下の章は、同樣にわれわれにとつても最も重要な問題として眞劍に考えなければならぬものを含んでおり、それについて充分に紹介出來なかつた事をおわびする次第である。

（昭和二五年九月・岩波書店刊・岩波新書本二五二頁・九〇圓）

——池田　誠——